

木山正義先輩を偲ぶ

当水交会の設立に参画され、後第6代会長を務められた木山正義先輩(以下海軍式に木山さんと申し上げる)が去る6月22日尽きぬ哀惜のうちに逝去された。満99歳を迎えられ、天寿を全うされたと申し上げても良いであろうが、まだまだもっとご指導を戴きたかったと思うのは私一人ではないであろう、

まず思い出されるのは、私が水交会の副会長を仰せつかったときに、これをよく読んで参考にしてみたいと、渡された「水交会の運営について」という小冊子で、ご自分が会長の時全常務理事に配布されたということであった。

ここに書かれていたのは、まさに木山さんご自身の信念であり哲学であった。特に感銘深く、今日まで忘れないのは「水交会は奉仕の団体である」「水交会の会長、役員、理事はすべて無報酬である」と奉仕の精神を強調されたことであった。木山さんは戦後多くの会社を経営されたが、それらはみな引き揚げてきた燃料関係の多くの在外勤務者が、就職に困らぬよう、海軍省で燃料を担当していた木山さんが八方苦心して設立したもので、責任感と奉仕の精神の賜物であった。

その後の60年を通じ、水交会だけでなく海軍に関係ある多くの団体の設立と運営をあるいは自ら主導し、あるいは支援された。海防艦頭彰会、海軍機関学校同窓会、米内会などは、そのほんの一例である。殉国の英霊に対する慰霊頭彰と海軍の伝統の継承は、生き残ったものの第一のつとめであると考えられたことはもちろんであるが、それだけでなかった。木山さんは、慰霊頭彰が日本民族精神すなわち「敬神、崇祖」「奉仕、殉国」の精神を振興するものであり、国家興隆の基盤であると強く信じておられた。このことは水交会の会長の時、寄付行為の改正を計られ、水交会の目的として「戦没者等の慰霊頭彰を行うとともに、旧海軍の伝統精神を継承し」と明記したところ、監督官庁の厚生省が難色を示したので、自ら折衝され、「よき伝統精神」とすることによって了承を得たという逸話にもよく示されている、

木山さんがきわめて勇敢であったことは、南京攻略に際し激しい攻撃を受けながら閉塞線啓開の任務を全うし、金勲章を授けられたことにもよく示されている。木山さんは教育にもきわめて熱心で、後輩の育成に尽力された。水交会長就任を契機に始められた「御苑会」もそのひとつで、毎月一回200回を超える講演会を通じて、各方面多種多様の立場からの講演に啓発された後輩も多かった。海上自衛隊の育成発展特にその教育のあり方にも深い関心を寄せられた。

ご葬儀の際掲げられたお写真は、本年正月ご家族が集まった際のものということであったが、子供や孫に囲まれた慈愛あふれるまなざしは、木山さんが本質的に情と徳のひとであったことを示しているのではなからうか。その上に責任感と任務に対する厳しさのカバーをかけておられたような気がしてならない。

長い間のご指導にあらためて厚くお礼申し上げ心からご冥福を祈ります。

中村悌次

注:平成30(2018)年11月14日、研究委員、岩田高明

木山正義氏は、海機40期、元日本燃料社長、(株)原書房、(株)日本科学研究所、日本車両(株)他の創設者。第6代水交会会長、御宴会会長、海防艦の会会長、その他各種の会の要職を務められた。2008年6月22日の朝、白寿で逝去される。